

災害情報の交通整理

株式会社ケイズプラン 代表取締役 CNCP 個人会員
小松崎 暁子



皆様こんにちは。私はIT 関係の仕事をしておりまして、昨年 CNCP のホームページ制作を承り、そのご縁で個人会員として登録させていただきました。土木・建設分野や、NPO 活動に関しては素人なのですが、温かく受け入れて下さり、またこのような投稿の機会までいただきまして心から感謝申し上げます。

さて、私の住む埼玉県吉川市は、古くは江戸時代から良質の早稲田米をお江戸へ運ぶ水運で栄えた天領地です。現在でも豊かな水を蓄えた水田が広がっています。

一方で、この町は中川と江戸川に挟まれた水害の多い地域でもありまして、今から68年前の1947年、キャサリン台風でも甚大な被害がありました。

大正時代の大治水工事で掘削された元荒川が、一夜にして昔の姿に逆戻りし、熊谷・岩槻・越谷・吉川・三郷を襲いました。地元消防団や若い者が集められ、川沿いに土嚢を高く積み上げて、収穫間近な水田を守ろうとした写真や資料が残されています。

しかし、土地の古老によると、葛飾には古くから『北からの水は防げない』という洪水鉄則があり、「川の水を堰き止めることよりも、小舟を準備し、食料や家財を移動せよ」と進言したにもかかわらず、若者たちは土嚢を運び続け、まもなく土手が決壊して被害を広げてしまったようです。この土地の地理的・歴史的な情報を持たない当局が判断と指示を誤ったというお話でした。

そして現代。掌にのせたスマートフォンで、気象衛星からの映像を閲覧でき、「今から30分後にゲリラ豪雨が来ます」と直前予報を受信し、Facebook や Twitter などの SNS では、一般人が現場の写真を投げ続け、ありとあらゆる情報を入手することができ、情報過多状態となっています。

そんな状況下では、不確かなデマ情報などで惑わされる恐れもあるかと懸念されますが、大震災後に行われた G 社の調査によると、災害情報は、信ぴょう性・正確性よりも累積量。情報量が多ければ多いほど情報そのものに自浄作用が起きるといふんですね。

古老の深い経験知、地域で大切に守られてきた言い伝え、民間人のつぶやき、そして専門家の知識。「まちの情報屋」として、これらのリスクコミュニケーションにおける大量の情報を見極めと交通整理に関わっていくことが「土木」と私の接点になっていくのではないかと感じております。皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。